

# あかしびと

ペンテコステ号 2012.5.27 発行  
日本バプテスト同盟金沢文庫教会

## キリストの手

(牧師)白根新治

ドイツの童話にホラ吹き男爵の物語があった。

彼は立派な着物を着て、立派な首飾りを身につけていた。ある時、水辺を歩いていたが、事もあろうに底なし沼に落ちてしまった。当然ボコボコと音を出しながら沈んでいく。ところが自慢の金の首飾りが役に立った。自分に忠実な立派な首飾りの所まで来ると沈まなくなった、と道行く人々に大ボラを吹いたのである。

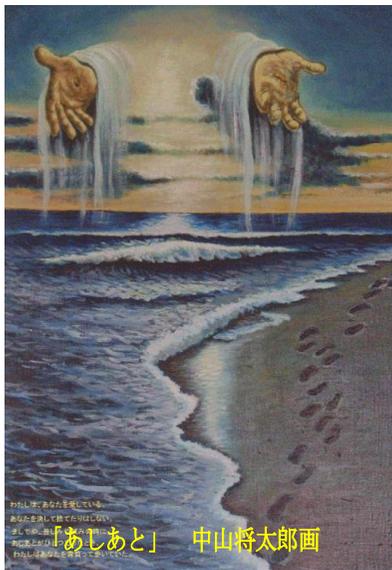
道を行く人々はそんなホラを信じる者はないだろう。だが、私はふと自分もホラを吹いて得意になっていることはないか、と思った。

現代の子供は私が生きてきた時代と違って、科学的で合理的な、衣服、食糧において、より

よい社会環境にある。恵まれた世界に自由に生きていける。

だが何故、地が揺らぎ、横から津波が、上から放射能が襲ってくるという事件が起こるのか？

これは決してホラではない。この時、多くの人々は悩み、苦しみ、愛する者を失って、絶望を感じた。中には孤立して、自



殺する人も出た。

ホラでもよい。物語の中の金の首飾りが欲しい。

勿論、そんなものに力があるわけではない。

この時、世界から救いの手が差しのべられた。日本でも沖縄の那覇教会の青年たちが隊を組んで、地震のあとすぐ現地に飛んだ。横浜在住の韓国の教会の牧師と信徒も、多くの物資を持って被災者を訪れた。今も続いている。キリスト教会も微力ながら奉仕を続けている。

彼らは、災害発生と共に、主イエスが胸に大きな傷を持って痛み苦しみながら助けに走り回っておられるのを感じ、

「我に従え!!」  
の声に励まされて、「愛と奉仕」に生きている。

不思議なことに主は死から甦られた。そして言われた。

「私は生きている。だからあなたも生きなさい!」と。

その声に力づけられて、死にそうになっている人々を、キリストの手となって助けているのである。

## 目次

キリストの手	白根新治牧師	.....p.1
教会とクリスチャン・ライフ	中山将太郎	.....p.2
内村鑑三著「後世への最大遺物」について	梅谷興三	.....p.2
「主が共にいて下さること」実感しています!感謝です!	S.N	.....p.4
教会の費用	中本 勉	.....p.5
東北震災地を訪れて	塚原明子	.....p.6

## 教会と

### クリスチャン・ライフ

中山将太郎

人、二～三人でよいから、とにかくキリストの御名に依って集まる、そこに教会ができる。教会は教会堂とは違う。教会堂が立派でも、キリストの霊が宿らないのは教会とはいえない。

昔、白人の教会に黒人のセールス・マンが礼拝にやって来た。受付係が、近くに黒人の教会があるから、そこに行けと言った。黒人を追い出したあの教会は、イエス・キリストをも追い出してしまったのである。

十字架の十字と同じく、横に同信の友と手を繋ぎ、縦に神と繋がって教会は形成される。教会は人と聖霊に依って成り立つ。文庫教会もその中の一つ、少なくとも週に一回は礼拝で集う。

しかし教会員は、あくまで罪人の集まりでしかない。よくいえば、救われた罪人であろうか？語弊があるかも知れないが、クリスチャンはわりと教育程度

が高い。ところがその分、知能犯が紛れ込み、教会で紛争と分裂を起こし易い。事実、教会は福音で論争になるのは稀、むしろ残念だが、俗世の社会組織と同じく、人事や金銭の問題でトラブルを起こす。

教会は福音を学ぶ学校である。当然教師である牧師や神父が居り、洗礼と信仰告白という入学試験を通して入る。でも、教師の頭(かしら)は何時でもイエス・キリストなのである。

また、学校は卒業するが、「キリストの学校」は、生涯卒業しない。卒業するときは天に召される時である。更に、神の御言葉を伝達する説教者は、一つのこと注意到しなければいけない。同じ程度を有する大学での講義と違い、聞く信徒のレベルはまちまち、神学博士から、文

字も読めない田舎の婆ちゃんに至るまで、説教はたいへん!! 全般的に浅く、しかし「学び」がないといわれても困るので、時には深く、ユーモアをまじえて、二十分以内に収めるのが賢明、無難！聴衆に若者が少なく、壮年や老人が多いから。

私は無教会主義を通して教会に入った。教会の外でガーガーいうのではなく、教会の中に入って艱難辛苦を共にし、自分の微力を献げる。今でも天路歷程、歩んでは躓く。毎日悔いては改め、十字架のイエスに救いを求める。これより良き人生を私は知らない。もう一度人生をやり直せるチャンスをくれるといっても、それを受ける勇気はない。これで、いいのだ。これでいいのだ。



バチカン・システィーナ寺院の天井にある絵、中山将太郎模写

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## 内村鑑三著

### 「後世への最大遺物」 について

梅谷興三

内村鑑三は文庫教会でもよく話題にのぼる大先輩の一人である。百科事典によると、日本人

のキリスト教思想家で、いわゆる無教会主義(無教派主義の意)を唱えた。

1861年生まれだから昨年は生誕150年ということになる。

昨年4月、「聖書をひもとく会」でこの本についての読書会があった。また、当教会がたまたまバプテスト同盟の当番で、

先覚者ミッションの眠る墓地の掃除に行ったことがあった。実はそこが有名な多磨墓地で、私は初めて内村鑑三や新渡戸稲造、賀川豊彦など近代日本黎明期、明治以来の先覚者、巨人とでもいべき偉人の墓にめぐりあい、感慨深きものがあった。

この本は内村が明治27年、32歳の時、キリスト教徒を対象にした夏季学校が箱根で開かれた際の、講話をまとめたものといわれる。従来内村鑑三によって書かれた聖書の注解書などを読んでいた私には驚きであった。それはあまりにも分かりやすく、具体的且つ自由な表現であったからである。

内村は当時すでに札幌農学校を卒業後、結婚、自費で渡米、白痴院で奉仕して苦労を重ねたり、アマスト大学で神学を勉強していた。

### 概要

幼少の頃より、江戸後期の儒学者、頼山陽の影響を受け、心酔していた。男子たるもの、千載青史に列するを得んという志をもっていた。そしてその考えがキリスト教の教えに反すると宣教師に云われて悩む。

しかしこの世を去るにあたり、少しでも生まれた時より世の中を善くしたいという考えをもっていたが、その為には何を遺していけばよいか。内村の表現によれば、50年の生命をくれたこの美しい地球、この美しい社会、この我々を育ててくれた山河、これらに何も遺さずには死んでしまいたくない。これは、必ずしも自分の名誉を遺したい、後世の人から褒めてもらいたい、ということではない。ただ、どれほどこの世界を愛し、どれだけ自分の同胞を思ったかという記念物をこの世に置いて往きたいのである、ということになる。

さてその遺物とは

第一にはお金、  
でもその才はない。  
第二には事業、  
しかしその才もない。  
第三には思想、  
これなら自分でも可能性はあると。

この本を読んで発奮、自分の将来を変えた多くの人々がいる。鈴木範久という内村鑑三全集の編集者が最近まとめられたところによれば

1. パナマ運河の技術者、青山 士
2. 大賀ハスの発見者、大賀一郎
3. 独創的哲学者、西田幾太郎
4. 関東学院創立者、坂田 祐
5. 「夕鶴」の作家、木下順二等々、枚挙に暇がない。

また彼の教育観は単に知識を学生に教えることではない。例えば植物学でいえば植物学に関する知識理論を与えることだけではなく、植物学に対する情熱を吹き込むことである、という。

Boys, be ambitious! 「青年よ、大志を抱け！」の夢の格言を残して、たった一年で日本を去った札幌農学校の校長クラークこそは正に真の教育者だ、と言っているように思える。



しかし、人間が後世に遺すことのできる金、事業、思想にはよくないものがある。だれにも遺せて有意義なもの、それは「勇ましい高尚な生涯」だという。一般に思想の表現物は生活、生涯の一部分であって、生涯のほうが遥かに大きい。パウロの書簡、カーライルのフランス革命史についてもそのことがいえる。内村鑑三の生涯を見ても、思想は偉大に違いないが、生涯の随所に光るものがある。例えば札幌独立教会の建築資金を、メソジスト派の宣教師から受けるについて、独立性が失われるからと思い、断わった。また、いわゆる不敬事件、日露戦争への



反対意思表示など、また信者を取り合う教派には組しなかったこと。最後に世界での英傑ともいうべき人物を紹介している。その一人はアメリカ人メリー・ライオンという女性で、「他の人の嫌がることをなせ」という精神を自分の女生徒に遺した。これは日本の武士のような生涯だったといっている。

また二宮金次郎は若くして両親をなくし、残酷な伯父のもと、本を読むための灯火の油さえ使えず、自分

で沼地を開墾して菜種をまいて油をとり、稲を植えて米の収穫した、という。天の法則に従い一生懸命頑張れば、天は必ず助けてくれる、という考えを持ち、

且つ実行し、幕末の農業改良に寄与した。

大言壮語することは誰でもするが、実行しなければ、キリストは異邦人である、とまでいい切っている。

敗戦で国土は消失し、震災で東日本は荒廃、高齢化で意欲の衰えた日本に遺していくべきものは何か、考えさせられる講演であった。

☆☆

## 「主が共に いて下さること」

実感しています！  
感謝です！

S.N

過去のことで、どん底の苦しみの日々がありました。当時息子は15歳、高校1年生でした。

写真手に

この子見ぬかと  
問い歩む

北海道は

無限に広し

食事したか

寝る場はあるか  
家でた子

ああ、与えたい

希みすべてを



私は初冬の北海道の街を、暗い心で、重い足で、食事も忘れて息子をさがし歩きました。そんな私に協力者が現れました。青年です。実はドロボーでした。1日目彼はアイディアをたくさん出してくれました。小まめによく働いてくれました。次の日その人は私のバッグから現金抜

いて消えました。当時はキャッシュカードや携帯電話もない時代です。旅行は現金を持ち歩いていました。白い封筒、茶色の封筒、ビニール袋、お財布、聖書の表紙の中と、小分けにはしていても全部一つのバッグの中に入れていました。残ったお金は百円玉5,6枚と聖書の中のお金だけでした。

横浜の家で電話番をしている夫に、お金を盗まれたことを伝えました。

「ヨカッタね！」と夫は最初に言いました。

「盗られたのよ！」

と私が強く言うと、夫は

「刃物で傷つけられたのでもなく、恐い思いもしないで持っていたのだからヨカッタんだ。山の中に連れ込まれて殺されたかも」と言いました。

本当にそうです。よかったのです。主が共にいて護ってくださいました。心より感謝のお祈りをしました。

その夜、さがしていた息子より家に連絡があり、帯広で住み込みで働いていました。目の前がすべて光り輝きました。すぐ、持ってきた冬物を届けに行くことになりました。それを聞いていた宿の人が

「最終列車に間に合うかな？外にタクシーを止めておくから早く、早く、玄関に」と言ってくれました。タクシー代は残った百円玉で足りました。駅では1万円札でキップを買いました。お釣りが思ったより少なかったの、遠いことを知りました。改札の駅員が大声で「早く、早く」と呼んでくれました。

乗り込んですぐに列車は動き出しました。これも感謝のことです。タクシーでお釣りを貰っていたら、列車に間に合わなかったと思います。百円玉が残っていたのも、宿の人のご親切も、改札口の人の大声も、すべて主のお導き、お支えでした。列車の中で喜びの感謝のお祈りをしているのに涙が出て止まりませんでした。その時知らない人が「大丈夫ですか？」と声をかけて下さいました。

「帯広に何時に着きますか？」とお聞きすると時刻表で調べて下さり、

「旭川で乗換えで、朝6時過ぎに着くけど、乗換え時間が3分だから、デッキの方に行きなさい」

と教えて下さいました。このことも感謝でした。

旭川発釧路行、最終列車は都会の通勤電車並みに混んでいま

した。一駅ごとに数人降り、2時間ぐらいでやっと座れました。立っていてもずっと感謝のお祈りをしていました。が、まだまだ足りないと思いました。

また駅に停まり、動き出したようです。いつの間にか、私の前の人も、隣の人も降りたようです。斜め前の男の人に私は声をかけていました。

「牧師さんですか？」

その方は眠っていらしたようですが、目を開けて

「どうして分かりましたか？」

と言われました。

「ワー、感謝です、感謝です！」と、私は興奮してしまいました。どん底の苦しみから今最高の喜びのお恵みの中にいることをお話して、

「祈っても祈っても感謝しきれない」

と私は言いました。北海道上芦別教会の尾添俊幸牧師先生でした。小さな声でお祈りをし、讃美歌を歌っていただきました。次の駅で先生は降りて行かれました。その時名刺を下さり、

「困ったことがあったら電話して下さい。教会に泊まってもいいですよ」

と言って下さいました。

ほんとうに主が共にいて下さり、目の前にいらっしゃる感じがしました。すごい感動でした。このことは私の宝物です。独り占めしてはいけないと思っています。何処にいても、いつもいつも主が共にいて下さり、必要なことは準備して下さい、分からないことはいろいろな形で教え導いて下さっていることを実感しました。この喜びと安心を多くの人にお伝えしたいと思



た。

夜明け前の真暗な中、光り輝いている帯広駅に着きました。迎えに来ていた息子は会社の作業衣を着て、大きくたくましくなっていました。（親バカかしら？）すぐに社長さんのお宅に御礼に伺うことにしました。お玄関先で土下座をしてしまいま

した。「働く年齢にも満たない未熟な子に働く場を与え、寝る場を与え、食事を与えて下さり有難うございました」

途中から声が嗚咽になってしまいました。本当に、本当に有難かったのです。

私が弱々しく見えたのでしょう。息子が横浜の自宅まで送ってくれることになりました。聖書の中の残ったお金で自動車代、飛行機代、宿代、食事代、二人分払うことができました。本当に必要なことはすべて主が備えて下さっています。安心です。感謝です。

その後息子は北海道にも行くことなく、私のそばで大学卒業まで過ごしました。今一児の親になっています。

感謝です。

尾添俊幸先生は36年の間に、北海道から名古屋へ、そして今は京都市東山区本町教会でお元気でいらっしゃいます。毎年賀状をいただいています。

主はその時その場の最善を、いつも与えて下さっています。心より感謝しています。



## 教会の費用

### 中本 勉

プロテスタント(新教)はカトリック(旧教)のシステムをプロテストして出来上がった新しい教会という事ができる。旧教はファーザー(神父)、新教はパスター(牧師)が牧会を担当し、前

者は独身男子、後者は夫婦とその一家で形成する。何れも生活費が必要なことは論を待たない。そこで規定された従来からの財源は、旧教においてはバチカン本部からの支給される金品により、新教では信者の献金によって侷われる事になっている。そこで問題点を我が新教に限って説明する事とする。



牧師も神の言(ロゴス)を解説する仕事を継続して果たすためには、霞を吸って生きている訳にはいかない。矢張り自分も家族も養っていかねばならない。それには必ず教会員の月定献金、礼拝献金、感謝献金、クリスマス献金、イースター献金等に依って牧会運営と生活費に当てる事となる。誤解してはいけないのは、信者が牧師を養っている

という考え方に陥らない事である。信仰とは、一瞬いっしょにその気持ちを堅持していく事である。決して油断してはいけない。自分自身長年信仰生活が続くと気が緩む事があり、はっと気付いて気を引き締めることがある。教会員はお互いにその事を自覚し、教会で献げる凡てのものは、過去を振り返っての感謝の徴であり、他宗教に見る賽

銭やお布施の類と異なり、キリスト教は決してご利益宗教ではない。以上の事をはっきり辨えようと、こんな素晴らしい宗教に帰依している事を、これまた感謝感激に満ちる次第である。

過日、一寸道を迷った兄弟姉妹も、この事が解ればきっと子羊のように目覚めて帰って来られる事と確信する。アーメン。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## 東日本大震災被災地 支援ボランティアでの 学びを通して

塚原明子

昨年三月に起きた東日本大震災では、人智を超えた自然の力を前に己の無力感を痛感し、自分が生きていく上で本当に大切なもの、真実なものを見つめなおすときを与えられた人が実に多くいたように感じています。また人間が止まるどころの知らない浅はかな欲から作り出したものを、結局最後には自分たちで制御しきれなくなり翻弄されるという悲劇に、人間の愚かさをつきつけられた人も多くいたのではないのでしょうか。私自身、あの惨事を前に、神様が人にこのような試練をお与えになるその御心は一体何なのかと考えずにはいられず、また小さな自分に今何ができるのかと自問する日々が続きました。そして、仕事もプライベートも含めて、自分の生き方を見つめ直し、新

たに模索することを余儀なくされました。そうした中で、それまでの歩みに終止符を打った事柄もあり、その喪失感とまた未来に対する漠然とした不安を抱えながら地元や東北で様々なボランティア活動が続けてきました。そこにあつたのは、自分とは比べものにならないほど極めて苦しい状況を強いられている方々の役に少しでも立ちたいという思い、そして様々な難しい問題を抱えている今の日本で自分がこれから日本人としてどう生きていきたいのか、という問いに対する答えを探す作業だったように思います。自分の「これから」を考え、歩いていく中で、自分さえよければよいという歩みだけはしたくない、そう強く思いました。正直に言えば、「これからどう生きるべきなのか」この問いに対する明確な答えや道が見えたと言い切れることは今まだできていません。し

かし東北の方々やボランティア活動を共にした方々との深い交わりの中で多くの想いに触れ、人の強さや祈りに触れ、大きな学びと励ましを与えられました。その学びをこうして証する機会が与えられたことに感謝しています。

昨年六月に訪れた塩竈、八月の石巻、秋から冬にかけて二度足を運んだ名取に今年三月に訪問した南三陸。それぞれの場所、それぞれの時によって状況は刻々と変わり、必要とされる援助の形も様々でしたが、東北を訪れる度にいつも実感したのは東北の方々の忍耐強さや土地に対する深い愛着、そして人に対する温かさでした。困難な時にあっても懸命に笑顔で前を向いて生きようとする姿、私たちボ



ランティアに対する温かい心遣いに、いつも与えるよりもずっと多くのものを与えられて帰ってきました。

思えばどの場所でも、出会った東北の方々は「語ろう」となさっていたと感じています。そこにあったのは「被災者とボランティア」の関係ではありませんでした。こちらがただの一人の人間として心を開き、震災や被災地の状況を前に感じた無力感、またこれまでの自分の歩みや不安をありのままに話した時、そこに人と人としての心の交わりが生まれたように思います。ぼつりぼつりと少しずつ、震災当日の話、その後の歩み、震災で学んだこと、そして「これから」に対する想いを、明るさを失わず、でもときに不安をにじませながら話してくださいました。その姿の中に、人は互いに想いを分かち合い、心寄り添わせ、そうやって支え合って生かされているのだと実感しました。この世的な富や名声や地位というものはあの自然の威力の前に実に儂く、そこに残されるのはただの一人の人間として生を受け、今を生かされている私たちひとりひとりなのだ、と痛感しました。聖書にある「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（ローマ 12：15）とは私たちが互いにただの小さな一人の人間として心寄り添わせたときに実現することなのかもしれません。

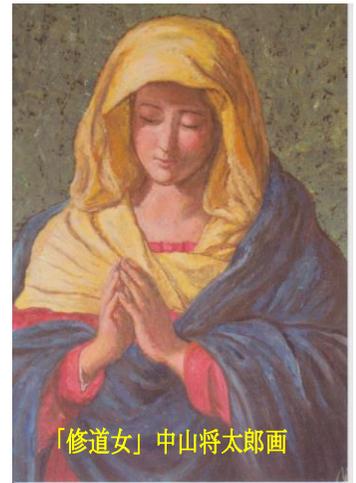
東北での沢山の貴重な体験を全てここにつづることはできませんが、一つだけ今年三月、南

三陸の仮設住宅を訪れた時のエピソードを紹介したいと思います。

その仮設住宅はいわゆる「抽選」にはずれた方々が各地から集められた寄せ集めの仮設住宅でした。震災前のつながりのある住人は非常に少なく、新しいコミュニティ作りのお手伝いとして私たちボランティアが定期的に集会所でカフェ（東北の言葉で「お茶っこ」）を開かせてもらっていました。そこに集まって映画をみたり、編み物をしたり、おしゃべりをする事で住人の方々の交流を深めてもらうことが目的でした。

私がお茶っこを開きに訪れた時、その仮設住宅の会長のY子さんは先に来て集会所を暖め、机のセッティングを済ませて笑顔で迎えてくださいました。そしてお昼時、住人の方々が昼食をとり各自の部屋に戻られた後、粉をこね、青大豆のきな粉を使ったお団子を集会所の小さな台所で作り、ふるまってくださいました。「ボランティアに来たのにこんなにもてなしてもらってしまい…」と恐縮する私たちに、Y子さんは「こんな東北の地まで来てくれたから、こういうの食べたことないだろうと思ったから作ってあげたかったのよ」と。そこにあったのはボランティアの人が被災者に何かをしてあげる、という一方的な構図ではなく、人と人とが愛情を持って互いに向き合い、慈しみあい、互いに与えあおうとする姿であったと思います。相手の為に何かをしてあげたい、そ

の想いにボランティアも被災者もなく、ただ一人の人間として隣人を愛し、敬い、仕えたいという想いでした。そしてこれが私たち人間の歩みの希望なのではないか、これこそがこれから東北が、また日本という国が真に復興を果たすために見失ってはならないもの、神様の御心なのではないか、私は今そう感じています。



聖書には「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大なるものは、愛である」（第一コリント 13：13）とあります。また「全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。」（第一コリント 13：3）ともあります。東北の地にはまだまだやることは山のようにあります。まだ語ることもできず、悲しみのうちにある方々も多くいらっしゃいます。そのことを私たちが忘れないように、そして隣人として寄り添い、愛の精神で仕えあいながら長い復

興の道のりを共に歩むことができるように、と祈ります。そして、その祈りの中に私自身がこれからの自分の道をたゆまず見

つめ、模索し、そして小さな業でも継続していくことができるように、愛の心を持って一つ一つの事柄に真摯に向き合い、隣

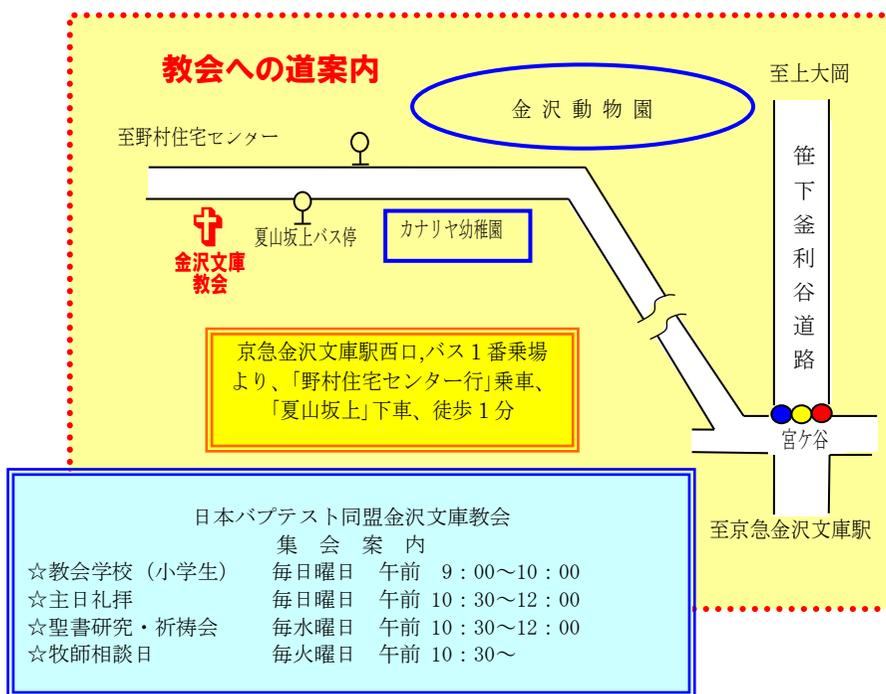
人を愛する歩みをしていくことができるように、そう強く願っています。

\*\*\*\*\*

### 編集後記

貴重な原稿を快くお寄せ下さり感謝申し上げます。8 ページの制限された紙面の都合上、文字の大きさ、行間隔等を工夫しました。レイアウトについて、何かご提案がありましたら、下記のアドレスに送信下さいますよう、お願い申し上げます。次回の「あかしびと」宗教改革記念号編集の参考にさせていただきます。(担当 犬塚志朗)

[inudukashiro@docomo.ne.jp](mailto:inudukashiro@docomo.ne.jp)



あかしびと ペンテコステ号

発行日 2012年5月27日

発行所 日本バプテスト同盟金沢文庫教会

住所 〒236-0046 横浜市金沢区釜利谷西 3-36-20  
Tel/Fax 045-783-5475

発行者 牧師 白根新治

印刷所 (株)高陽印刷所

住所 横浜市南区白妙町 3-39

電話 045-251-4832